
神の精霊伝説

高坂桐乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の精霊伝説

【Zコード】

Z3961C

【作者名】

高坂桐乃

【あらすじ】

クロウが涙の秘宝を手に入れた物語の続編。魔王の基地にジルバたち兵士が攻撃する。だが兵士達は死んでしまう。その作戦をどうして行つたか。王様の命令は正しかつたのか。そしてプロントニアリバランは生きていたジルバと妹のテミとその魔王の基地を探索する事にした！！

プロローグ（前書き）

この物語は涙の秘宝・クロウの正義の続編として設定しております。世界観はクロウの正義と同じくトランミコオノを題材にした作品です。どうぞ、皆様楽しんでください。ゆっくりしてじってね！！

プロローグ

この世界は神の精霊プレスがいた世界。

しかし闇の魔王が神の精霊プレスを封印した。

神の精霊プレスを助け出してからではないと魔王を倒す力は無い

いつしか人達は希望を失いつまで世界があるか考え始めた。

そしてトライラーと呼ばれる町のお城の王子ブロント＝アリバラン王子が世界を救う為に仲間を集める事にした

プロントの大ファンタジーである

「わかりました」

「この世界は魔王と戦うトノコトヨリ世界。

そして兵士達がいた。

「ジルバ隊長。出撃します」

「この魔王の墓地582号は結構手薄だ。」

そして其処を攻める事にした。

「スライム達がくるぞ、おれはお前達とは違つ、逃げてお前達に指令をだす」

ジルバは逃げた。それは兵士達を見殺しする事だ。
ジルバは何故逃げたか、それは後で明かされる。

「へへ、ジルバ無しでやるしかないか…」

青い粘液が兵士にこびれつへ。

その後……

「はなれる。はなれる」

その兵士はスライムに吸収されるしかない。

そして電波が来た。

「惜しいがこの兵士を燃やせばスライムが死ぬ。世界の為だ」

その電波は遠くに逃げたジルバが放ったものだ。

ジルバは悲しき声で世界の為だと、王の命令だからそう言つて、仲間を見殺しにする……

「アリアアリサー」

そしてこの兵士は燃えぬきた……

「1人、2人どんどん死んでいくよ」

初めは19人の兵士が居たが今では8人に減つてしまつた。
そして敵のスライムは沢山居るようだ。

そして電波が流れた。

「そろそろ爆破スイッチを起動させろ」

兵士はこの爆破スイッチを押すと自分達は全員死ぬ。
それなのに俺たちを殺すのか、ジルバと思いながらジルバに向かつて言つ

「私たちが死んでしまいます。それでも良いんですか。ジルバ殿」

それは和解もせず、ジルバの命令の言葉、ジルバの優しい性格もありました。

「基地を壊さなきや死んだ人の分が無駄です。君達は鎧も装備しています。その鎧が守つてくれるでしょう」

爆破スイッチを起動した。

この魔王の基地582号は破滅した。

しかし・・・兵士達は行き絶えた。

それが王国にいきわたつた。

兵士達の犠牲の事は言われず、魔王の基地が減つた事のみが語られた。

「よくやつた。ジルバよ。この兵士達は天国で良い人間としてやつ

ていける。兵士のボスジルバ。これからもがんばりなさい」

王は通信でジルバに言った。

「わかりました。王様……」

第1話 旅立ち

王「プロント王子。魔王の基地582号と呼ばれる場所に行け！！！」

この人はアリバラン国の王様。プロントの父。威厳のある王様なのが、最近少し、様子がおかしいようだ…

プロント「わかりました。父上」

こいつはプロント＝アリバラン。アリバラン国の王子。金髪の髪を一つに束ね、青いマントと鎧をつけているカッコいい王子様である。

人気は高いとは言えない。それは、少年漫画の馬鹿主人公系の性格だからである。

王「魔王は世界を奪いにシレンは閉鎖されて。せめても世界ぐらいは平和で居て欲しい」

王の言葉にプロントは呆れてしまった。

魔王が世界を奪ったのは合っているがこいつにシレン（こいつにTAK風来のシレン）は関係ないと思われるからである。

プロント「こいつにシレンは関係ない。仲間は誰が居ますか。」

王「娘が旅に出たがっている。テリジルバと一緒に世界を救つて来い、わかつたか。プロント」

プロント「わかりました。」

セイクントヒジルバがやつてきた。

ジルバ「私はジルバ、ブロント様を大事に守ります。」

テミ「お兄様。一緒に行きましょ」

テミは金髪のウエーブヘアの少女。青い田の縞々の帽子を被っている。

ジルバは全身銀色の鎧をつけている男。鎧男である。

王「まずは魔王の基地582号に行くとよ」

俺らは魔王の基地へと向かつた

しかし、武器は無いので武器屋へと向かつた」と…

* * *

向かつた武器屋は火によつて燃えており、そして色々な奴が武器屋を荒らしていた。

フィスー「ククク、燃やしてやる『炎の舞』」

炎が武器屋の屋根を襲つた。

そして武器屋の屋根が崩れた。

ガーライルの店長「ぐつ」

ファビー「終わらせる。武器屋壊し『かめはめ波』」
すごい黄色いビームが店長を襲つ

店長は死んだ……

ブロント「武器が無いし。王様に相談するしかない」

そしてトミ「ジルバはついていった。

トミ「まつてよー」

ジルバ「王様に相談するのか…」

そしてブロント、トミ、ジルバは王様の場所に行つた。

王「武器無しか。なら其処の武器屋で鉄の剣と投槍と短剣と鉄の槍を買え。お金を渡す。」

ブロントは王様からお金を頂いた。
そしてその武器屋に向かつた。

武器屋は消滅していた。

幸い、鉄の剣と投槍と短剣と鉄の槍が一つだけ残つていたので手に入つた。

そして王城ホワイトナイツ・ホワイトナイツである王城に行つた。
王城はブロントの家でもある。トイラー城だ。

王「ギャグ多しシリアルス少な目で冒險して来い。その前に魔王の基地582号で道具をもてるだけゲットしてきて欲しい」

ブロント「わかりました。」

ブロントは納得して冒險に行つた。

ジルバ「王子は納豆食つて冒険に行つたのか」

ジルバのギャグ、そしてプロントの突つ込み

プロント「納豆食つてではなく納得だ」

そうしてプロントは旅に出た・・・

第2話 魔王の基地582号

「ここは魔王の基地582号。

魔王の基地だつた場所。崩れた建物が多く、障害物だらけ。さらに、地雷なども多くあり、大砲を撃つ戦車を使う敵も多く生息。一部の魔王軍モンスターまでも生息している驚異的な場所である。

その場所に俺らはやつてきた。父（国王）の為に

ジルバ「……此処は魔王の基地582号。俺の仲間達がやられた場所だ」

ジルバは悲しい声と苛立ちでそう言つた、そしてこの後に淡々と話す。

ジルバ「国王様の命令で仕方なく仲間を裏切つたんだ。おれの所為で、おれの所為で……」

ジルバは犠牲になつてしまつたかつての手下の兵士達の話を俺らに言つた。

テ//ミ「私の父上様がこんな酷くなつたなんて……」

ブロント「ジルバ、俺の父が何時からそつたんだ」

テ//ミ「俺の話を聞き、ジルバは答えた

ジルバ「わからない。特に知らされてない」

ジルバさんも知らないようだ……

父はどうして酷い人間になつたのであらうか、この魔王の基地で分かるかも知れない

トリ「この先に言つて何をするか知りたいつ」

トリの質問を聞き、魔王の言つた事を思い出す。

ブロンスト「ここで兵士の使つていた鎧とか魔王軍の武器や鉱物などで軍事発展したいんだよ。

魔王軍が少ないとと思うから危険性も無いと思つんですよ。

冒険の前にそれをしてもらいたいんですよ。」

この基地で鉱物や鎧などを手に入れ、進んでいくと一人の人がボロボロになつて座つていた。
かなりの意識をとめていて生死の危険がある……

第3話 悪靈の出現

俺たちは魔王の基地582号を歩いている。

ブロント「ジルバさん、ここ、危険な予感がするな……」

ジルバ「仕方ないよお！」

この基地は錆びた鉄工、壊れた機械などが散乱しており、大変危険な道であった。

その上、空氣も何故か、邪悪な感じがするようだ……

一つの靈が俺たちに襲い掛かってきた……！

ブロント「なー、なにものだつ……！」

靈は猛スピードでブロントを襲う。

靈は軽く、力は無いが生氣が少し失われた。

テニ「この靈たち、嘆いているわ……」

テニはその靈の心を少し感じ取った。

テニ=アリバランは俺の妹だ。かなりの成績優秀で靈なども心を通

わす力も持つ。

難しい本や書、魔法の杖なども使用できるという実力者。

死靈「……ジ……」

靈は何体か集まつて死靈になつた。

その死靈はジ…と言葉を放ち、闇に包まれた剣のよつた物を出現させ、ジルバへと攻撃を放つ

ジルバ「おりやつーー！」

ジルバは鉄の槍を振り回し、相手の闇の剣のよつたものを小さくする。

それでも消えないでの鉄の槍でその攻撃を防御した。

死靈「……ル……バ……！」

死靈は有毒性のある水分をジルバへと発射。

多少の酸も含まれていると思われる。

その攻撃を受けたら鎧が溶け、最悪、皮膚にもダメージが及ぶ…

ブロント「つりやつーー！」

俺は死靈へと攻撃を放つ。
死靈は体の一部が消え去つた。

ジルバ「オラオラッ！…！」

ジルバは鉄の槍をブンブン！…と振り回し死靈を攻撃した。
死靈は全て消え去つたと思いまや、死靈や靈が集まって一つの悪靈
が出現した。

悪靈「我は、ジルバの所為で殺された兵士達の魂であり、その無念
を晴らす為にジルバを殺す！…！」

第4話 悪靈との戦い

スライムや爆発などによって殺されてしまった兵士達……

その悪靈が出現し、プロント、ナミ、ジルバへと襲い掛かってきた。

何故か！ それは、ジルバの命令により、殺す事になってしまい、ジルバを恨んでいるから。

プロント「いくらジルバを恨んだって、人殺しは犯罪だ」

悪靈「いや、ジルバを殺さなきやならない！ 俺達は犯罪者ジルバに殺された。『ダークメテオ』」

悪靈は恨みの心を吐き出しながら宇宙から闇の隕石いんせきをジルバへ向かって落とした。

ジルバは鎧を着ているとはいえ、メテオなど、魔法には弱いらしく、かなりのダメージを負った。

ジルバ「ぐつ・・・・」

悪靈は鋭い剣を出現させ、ジルバへと突き刺す
ジルバは、それを察知し、鉄の槍で防御する。

そこをプロントが切り裂く！！

悪靈「この程度の攻撃は効かない！！『デスブレード』」

剣の衝撃波じょうげきはがジルバに一閃いつせん。ジルバは思いっきり鉄の槍を振り、衝撃波を和らげた。

プロント「お前らの弱点はジルバ集中狙い。ジルバは鎧で防御力が高い為、倒すのは時間が必要だ！！『微塵斬り』」

プロントの必殺剣技発動。微塵斬り。

連続で3回悪靈に斬りつけ、悪靈は消え去った。

プロント「やつたな……」

ジルバ「悪靈も成仏しただろ？……」

テミ「でも、お父様がこんな人じゃないはず……何か異変があつたと思わない！？」

プロント「確かに……」

ジルバ「ここで鉱物を全て入手したら戻りうぜ……」

ブロント「了解した……」

俺たちは鉱物を入手し、王の居る王城へと向かつた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3961c/>

神の精霊伝説

2010年10月15日21時09分発行